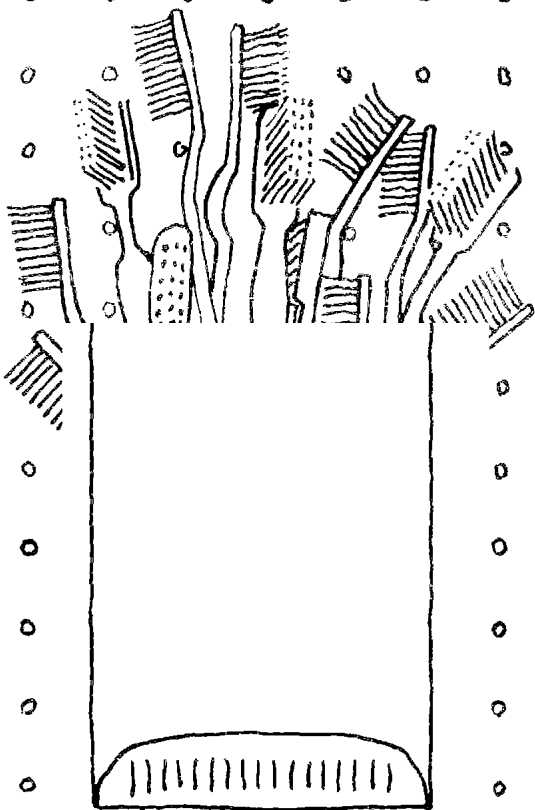


品田家は13人!!

田家は13人!!

品田
み豊
す治
え共
著



日本教文社

品田家は13人!!

品田 豊治 共著
みすえ

¥ 420

初版発行 昭和45年6月25日

著者との
協定により
検印省略

発行人 辻村彦次郎

発行所 株式会社 日本教文社

107東京都港区赤坂9-6-44

電話 東京 (03) 401-9111(代)

振替 東京 55519番

© 1970, T. Shinada
Printed in Japan

落丁・乱丁本はおとりかえします

飯島印刷・黒田製本

0037-7019-5809

わが家の近況

——はしがきに代えて——

子供が十二人いるというと、不思議な顔をする人がある。この大家庭に、ドイツで結婚した長男の孫第一号であるマークスがきて仲間入りをした。早いものでもう二年近くにもなる。ただいま三歳半。覚えざかりで、瞬間瞬間に新しいことばを覚えたり、歌をくりかえしたり、珍妙な表情をしたりで、上はパパから、下は末っ子まで、「かわいい、かわいい」と大へんである。

ついこの間まで、この「かわいい、かわいい」は末っ子の洋ひろしに向けられていた。小学生のチビ兄さんたちも洋にだけはおやつのおすそわけをする。だっこされて、本を読んでもらう。お話をしてもらう。いつもニコニコして絵を描いているおとなしい子、それが末っ子のヒロちゃんだった。ところがこの洋がこのところかわってきた。マークスにいたずらされてもがまんする。一緒に寝てお話をしてあげる。赤ちゃんから少年へと一足飛びしたような気がする。ママが二度目に行ったドイツでしばらく暮した嫁のマリー・テレーズや孫のマドレーヌもまだ一度も来日しないが、品田家の新しい一員である。

十二人兄弟といっても、いっぺんに十二人になったわけではない。二十一年にわたって、いつも新しい「赤ちゃん」の到来によって、かわいがること、いたわること、がまんすることなどを覚えて、自然に前の「赤ちゃん」は兄や姉になっていったのである。わが家の子供たちの成長の仕方の大きな特色である。

子供の成長の仕方のもう一つ、それは「触れあい」である。触れあいといっても種々雑多、おやつをとられたとかとらないとか、そんな小さなことから始まる実力行使のケンカから「プラモデルの塗料のとき方はかくかく……」「タコの骨のけずり方は……」「チョウのテンシの仕方は……」という話まである。近頃は来る晩も来る晩も大きな子供たちが集って、私たちと学生運動のこと、アルバイトのこと、受験のこと、何から何までよく話すのである。断絶とか疎外とか言われる世の中ながら、とにかくわが家はそろってくたくた知らずで、子供たちは元気いっぱい毎日はりきっている。

わが家のチビ君たちも、もうチビ君と呼べないほどになってきた。二十歳以上も四人、一番上が二十八、一番下は七つ。終戦直後の焼け跡を遊び場に、山ごぼりの汁を身体にぬって、崩れた煉瓦や石の山を走り回り、他の楽しみは毎日日本を読むこと、そんな育ち方をした上の子供たちと、甘いもの、テレビも、おもちゃも……という下の子供たち。住む家に困り、生活に困った時代を共にしてきた子供たちの間にも二十年という時間は広がっている。一人一人の子供たちは、身体も才能も性格も、背負った時代も、受ける教育もみんなそれぞれ異なっている。しかし、わが家という一つの、つ

ぼの中で、身体で、ことばで、そして心で、反発しあい、励ましあい、激しく触れあって成長しているのである。

世の中はめまぐるしく事が起っている。十年先のことは誰にもわからない。しかし、私たちは、わが家のつばの中から、どんな変化にもビクともしない、どんな時代にも目を真直ぐに前に向けて生きるこのでできる人間が十二人、育ちつつあるのだということを疑わない。

去年の十月に結婚した長女も、七月に出産の予定で、孫第三号が誕生する。家で一番あばれん坊の七男が神父さんになるんだと言い出し、今年の四月、名古屋の南山中学に入学した。毎日わが家は、新しい出来事でわきたっている。

ぼくのお母さんは、やせているのに13人も子どもをうみました。だからいつもねむたくつてもねられないといっています。きょねんまでは朝のしごとは五時半におきて十一時までかかりました。でもことしの四月からは上のお兄さんやお姉さんたちがつたうので、朝のしごとは六時におきて九時におわるようになりました。テレビはめずらしいニュースしかみません。でもよるはパパとならんでもみます。どちらかがねると、いっしょにねちやいます。ぼくはとってもなががいいとおもいます。

これは家族そろって出演したフジテレビ「親子を合わせるベシ！」（5月11日放映）で洋が読んだ作文である。最近のわが家のビッグニュースはなんといってもこれだろう。このときスタジオで、わが家の子供たちは思いがけず、テレビ局の招待でドイツから帰国した長男・昌泰に九年ぶりで再会したのである。子供たちはカメラの眼など忘れてしまって、涙を流して抱き合っていた。いあわせたテ

レビ局の人たちも「今日はもらい泣きしてしまいましたよ」と言っておられた。

それに司会の高橋圭三アナウンサーが「こんなにいい家庭ははじめてみました」と目を細めながらほめてくれたことも印象に残った。

本書が皆さまへのささやかな贈物となれば幸いです。終りに、原稿をまとめていただいた日本教文社の黒沢聖子さんと、写真を提供いただいた方々に心からお礼申し上げます。

尚、文体・表現は、私たちの著書ながら、第三者の立場で書いたものもありますが、御諒承ねがいます。

昭和四十五年五月十五日

東京都杉並区善福寺一―一―二四

品 田

豊 治
みすえ

品田家は13人!!

目

次

わが家の近況

—はしがきに代えて—

I 太陽よ いそがないで！

ママと一ダースの子どもたち

—品田家のある一日—

引っ越し八回、パパとママは大いそがし

—品田家のうつりかわり—

II つくしんぼの合唱

青い目のお嫁さん—長男・昌泰君—

ハイデルベルグのロマンス—長女・和恵さん—

社会福祉に夢を抱く—次男・高志君—

陽気な“先生”の卵さん—次女・典子さん—

品田家の修繕屋さん—三男・良久君—

世界中を空想旅行—四男・信昭君—

ぼくは動物が大好き―五男・実君―

おてんば娘じゃないわヨ―三女・めぐみちゃん―

兄弟そろって秋川へキャンプ―小学生のチビ君たち―

わが家の太陽―九男・洋君―

Ⅱ マリアさまとダルマさん

ママの祈り

「父の日」に思う

教育・育児に関する11章

―パパとママとの対談―

教師のみた12人の中の1人

―インタビュー―

マリアさまとダルマさん

―子ら大いに語る―

装
画

磐

広

I 太陽よ

いそがないで!



ママと一ダースの子どもたち

——品田家のある一日——

マンモス家族

治君と洋君がつれだっておつかいに出た。はじめ肉屋に行く。

「ブタ肉二キロちょうだい」

「それからソーセージ二十五本ちょうだい」

二人が大声で店員に告げる。店員は二人の注文を耳にしても本気にしない。

「坊やたち、二〇〇グラムのまちがいだろう？」

「そうじゃないよ。ブタ肉二キロだよ。ちゃんとママからきいてきたんだから」

治君は口をとがらせて言う。店員をにらんだ。品田家の食欲を知らない新米の店員なら、一度は必ずこの二人組の買物にどぎもをぬかれる。

お肉とソーセージの大きな包みを腕にかかえた二人は、つぎに八百屋へ。治君はママの書いてくれたメモをみながら、お客さんの後から大声をはりあげる。

「おねがいします、大根八本、白菜二把、レタス十個、キュウリ十本、それから……」

まわりのお客さんがふりかえった。八百屋の太ったおじさんは治君の顔をみると、
「やあーッ、品田さんのぼっちゃんたちか」と言わんばかりにニコニコしながら、

「へい、まいどありー、ぼっちゃんたちには持てないから届けてあげますよ」

と言うと、治君からママの書いてくれたメモを受けとった。

大根一本が二百円もする世の中で、品田家のウルトラC級の買物はオドロキである。毎月のお米代一万五千円、牛乳代だけでも一万三千円、毎月の食費にどうしても十万円はかかる。それも上る一方……
……パパは上智大経済学部教授だが、家庭の経済は小さいママまかせ。

核家族化する大都会に十二人の子どもをもつ大家族があった。さて、このマンモス家族の一日はどうなっているのだろう。

朝まだき

東京都杉並区の静かな住宅街の朝まだき、冬の陽が昇るにはまだずっと間があり、つめたい空気があたりをヒンヤリおとしている。ママはある物音にハッとして寢床から出ると、牛乳屋がビンをガチャガチャさせて遠ざかってゆく音が聞えている。澄んだはりつめた空気がママの全身を包む。

「もう朝だわ、さあ一日が始まる！」

身仕度を整えながら、体の奥底から新しい力が湧きあがってくるように感じる。台所の方に歩いてゆくと、新聞配達少年のピリッと新聞をしごく音が耳もとに伝わってきた。夏でも冬でも毎朝五時半の起床、それは目覚時計の必要もないほど正確な、ここ十数年来の習慣である。

流しの水道の蛇口をひねる。しばし間をおいてしぶきをあげてあふれ出す水……その冷たい感触に一日の始まりを心に強く読みとる。

「さあ、いよいよ戦闘開始、これからラッシュアワーがはじまるんだわ」

ママは手ばやに朝食の仕度にとりかかる。朝食用に食パン四斤、牛乳一・八リットル、バター半ポンド、それにジャムや野菜をそろえ、昨夜から用意しておいたお弁当のおかずを火をとおす。

「今日のお弁当は、パパの分もいれて八つだわ」

ずらりと並んだお弁当箱におかずをつめながら時計を見るともう六時半。

「もう電車通学の子どもたちを起こさなくちゃ」

毎朝の行動は、それこそ五分のくるいもなく正確に進められる。そうしないとあとがつかえる。まさに国鉄なみの過密ダイヤによる時差通学。

どこの家でも朝の出勤時の主婦のいそがしさは格別だろう。でもそれはせいぜい二人か三人、多くて五人を送り出すくらいのものだろう。ところが品田家は、なんと十一人、いそがしさもまさにウルトラC級。

眼が哀願する子犬のようにジッとママを見つめる。十一人を順序よく定刻に送り出すには、ひとりのわがママも許されないのだ。



パパとママをかこんで遅組の朝食（39年頃）

「おはようママ」

めぐみちゃんが目をこすりこすり第一番に起きてきた。

「おはよう、典子ねえちゃまは？」

「まだ寝てる、起こしたんだけど起きないんだもん」

「しょうがないわね、遅刻しちゃうじゃないの」

ママは心を鬼にして、各部屋部屋をまわって起床ラッパを鳴らす。

「ユタカくん、もう時間ですよー」

ママがそう言っても返事がない。そっと障子を開けてみると、エビのようになると毛布にくるまっている豊君の姿が見える。

「かわいそうだけど仕方がないわ」

そう思いながら毛布をはがすと、豊君の眠そうな